

察する事が出来ます。胞胚の表面構造と、全体の形は、毎週規則的に変化して行きますが、これらの変化が、6週から12週迄図説されます。8週以後は、表面が半透明になるので、レンズ面を直接羊膜表面に当てる事で、表面反射を防ぎ、内部を鮮明に視く事が出来ます。

5) Prof Summ Kurt (西独): Progress in Endoscopic Intruabdominal Surgery

Semm 教授自身が開発した調節可能な温度によつて音の違う電気メスに、鰐の口を思わせるクロコダイル凝固鉗子を用いて、卵管の一部凝固による不妊娠手術や、卵巢嚢腫(内容液吸引後、嚢腫の壁を一部切開・切除する方法)や、妊娠卵管や虫垂の切除等を無血的に行う事が出来ます。もう一つの Roeder-Loop の開発では、従来充実性の大きな物体(ex. 卵巢実質や筋腫核等)を腹鏡の外套管を介して剔出する事が不可能であつたのを、本器では小さく削り取りながら自動的に削つた部分が手元に送り出されて来る。残つた細片は生食水を注入して洗い、生食水と共に吸引管で吸いとる。斯様にして、現在では、多くの手術が安全に腹腔鏡で行なえるようになった実績をお見せします。

6) Dr. Brandin Jan (スウェーデン): An Intratubal Device (ITD) for Sterilization by hysteroscopy. The "P-Block"

使用前の乾燥した状態では、固くて小さく、子宮鏡を用いて子宮腔から卵管狭部に挿入すると、体液を含んでゆつくり大きく膨らむ科学的材質を用いて "P-Block" という ITD を揃えました。この材質を用いての ITD について世界の方々との討論を希望しております。

7) Prof Ohkawa Kimiyasu (日本): Miniature Pan-Endomicroscope and its clinical use.

I 型(直視)、II 型(側視)の極微内視鏡(倍率100倍)を用い、目的部位に1%クレシルバイオレット・アセテートを塗布(チオニンを加えると青味が強まり更によく見える)すると、細胞核が瞬間に鮮明に染まるので、直接先端を当ててきます。初心音でも容易に良性と悪性の診断が可能です。

55例の異型上皮では、核の排列と大きさに異型が認められ、25例の上皮内癌では、更に強い異型細胞が認められ、且つ範囲が容易に決定出来ました。20例の頸管内異常上皮や子宮体癌例、35例の卵巢癌では、範囲がはつきり決定されたばかりか、癌細胞の腹膜転移も容易に見る事が出来ました。

8) Dr. Shibata Naohide: (日本) "An operating table" devised for multi-purpose of BGY/GYN treatment.

内視鏡検査を含め、産婦人科の手術は、大きく截石位と胸膝位、二つの体位に分けられます。

そこで、手術台上で、ベルトを利用して自動的に患者の体位転換が出来る手術台を考案してみました。これを用いれば、体位の異なる内視鏡検査同志を連続的に行いうるし、内視鏡と腔式手術の合併利用等、産婦人科手術を合理的で安全なものにする事に有益であると確信しております。

9) Dr. Shibata Naohide: (日本) The "training Box" for gynecologic endoscopy

産婦人科内視鏡の教習用ボックスを揃えて見ました。上下に反転するだけで、クルドスコピー、ラパスコピー、子宮鏡、肛門鏡の典型的視野が得られ、クリップや輪ゴムによる卵管結紮の練習等鉗子操作の反復練習が出来るようになっていきます。ティーチングスコープやTVRでは習得し難い、実戦的な勘が独習出来ます。(柴田直秀)

SE-6: Pathophysiology of Trophoblasts

本セッションで展示される6題は絨毛および絨毛性腫瘍をテーマとし基礎的、臨床的諸問題がとりあつかわれている。着床部における遊離絨毛細胞の役割(日本医大)については従来論議の多いところであるが、演者は組織化学的或いは免疫電顕法を用い cell coat, レクチンリセプター、 3β -ol-steroid dehydrogenase について検討を行なつた結果 Junctional zone においては遊離絨毛細胞が子宮内膜に侵入するとともにステロイドホルモンを分泌し脱落膜化を促進させ妊娠成立のための環境づくりに重要な役割を果すという結果を示している。絨毛細胞表面の糖蛋白の生物学的役割に関する研究(東大)も妊娠を同種移植という観点から考える時興味ある課題である。本発表では絨毛細胞表面の糖蛋白は hCG であろうとの確点に立っている。そしてニューラミニダーゼ処理及び未処理の株化絨毛細胞のヌードマウス移植成功率を基盤として糖蛋白である細胞表層に存在する hCG は絨毛細胞を母体の拒絶反応より防禦する免疫学的な barrier となり得ることを示唆している。胞状奇胎由来培養細胞株の樹立とその性格に関する検討(東海大)では、従来株化のむつかしかつた胞状奇胎由来のトロフォブラスト細胞の株化を成功させ、その性格を電顕形態学的、染色体分析、hCG、胎盤アルカリフォスファターゼ

の微細局在を中心に検討を試みた結果の発表が行なわれる。臨床病理学的な演題としては晩期妊娠中毒症胎盤の病理組織学的研究（信州大）がある。中毒症の発症と胎盤の組織学的変化についてはいずれが原因であり結果であるかはなお判然としない部分が多いところであるが演者は多数例の中毒症胎盤を光顕的に検討し、特に絨毛における微細構造上の変化の特徴として、ラングハンス細胞からシンシチウム細胞への移行型を示すトロフオブラストの増加、シンシチウム結節形成の増加、絨毛血管周辺の基底膜の重層化をとりあげている。このような変化と中毒症胎盤の機能的変化のむすびつけがどのように行なわれるかがこの演題の興味あるポイントとなろう。絨毛癌の臨床面を取り扱った演題は2題ある。一つは絨毛癌の臨床期別分類と予後（慈恵医大）である。従来絨毛癌の期別分類については統一的な見解は示されておらず、癌のTNM分類に相当するものはないので、演者はそれを念頭におきつつ臨床期別分類を試みている。そしてこの分類法と予後に関するretrospectiveな検討から有意義な分類であると強調されている。もう一つは熊本大からの演題で、絨毛上皮癌脳転移の4症例に関する症例報告である。我々がしばしば遭遇する絨毛癌の脳転移症例の診断におけるCTスキンの有用性を強調しMTX, ACT-D, エンドキサンの三剤併用療法が有効なことは勿論のことであるが、従来あまり試みられなかつた外科的療法をも積極的にとり入れれば、極めて予後の不良である本疾患でも好結果が得られる場合があることを実例をもつて示している。（奥平吉雄）

SE-7: Diagnosis of Gynecologic Malignancy

婦人科悪性腫瘍の診断に関する6題の研究が展示される予定である。視覚に訴えることにより、新しい診断法の真価がより多くの人に理解していただけるものと思う。6題の内容を簡単に紹介しておくので、あらかじめ見当を立てて実際の展示を御覧になれば一層有益であろう。

江藤ら（国立京都病院）は子宮頸癌症例に骨盤内血管造影法（PAG）を行ない、各進行期に特有なPAG所見が得られたと言う。主として視診と触診にたよっている現在の臨床期別分類に、より客観性のあるPAG所見が加えられることにより、治療法の選択や予後の推定にきわめて有力な根拠を与えることになるであろう。

篠原ら（東海大学）は子宮頸部の正常上皮から浸潤癌にわたる症例に、コルポスコピー、コルポマイクロスコーピー、超軟X線撮影法の3者を用いて、微細血管像の比

較検討を行なっている。この解析結果から初期間質内浸潤癌の術前診断が可能になるかもしれない。

福本ら（岡山大学）は骨盤内腫瘍の症例に超音波断層法とCTスキンの両検査法を行ない、複合画像診断の技術を開発することによつて、情報量の増大と診断の確実性が得られたと言う。進歩した診断機器を実際に活用することにより、診断精度の飛躍的な向上が期待される。

本間（関東労災病院）はCTを骨盤内腫瘍の鑑別診断のみではなく、悪性腫瘍の転移、消化管や泌尿器の障害、治療法の効果判定など多方面に用いて、その診断的価値を確認したと言う。興味ある実例が提示される予定である。

矢嶋ら（東北大学）は宮城県における17年間の子宮頸癌住民検診の実施成績をまとめて発表する。検出した浸潤癌1,249人、上皮内癌1,150人、ディスプレイア2,920人という膨大な数をみても、その努力のあとをうかがい知ることができる。確立した早期診断法の技術が実践の中で生かされた貴重な成果と言えよう。

Brun del Reら（バーゼル大学）は乳癌の疑われる症例に対して、新しく考案したX線撮影の補助器具とバイオプシー用ピストルを併用することにより、的確な乳腺疾患の診断が可能になったと言う。欧米では乳癌を婦人科領域の疾患として取り扱っているところも多い。婦人科悪性腫瘍の診断というテーマの中に、乳癌の診断法が展示されるのも国際学会ならではの成果として高く評価したい。

以上婦人科悪性腫瘍の診断についてわが国から5題、スイスから1題の発表が予定されているが、国際的にも最高の水準と思われる診断法の提示がなされるものと期待してよいであろう。（新 太喜治）

SE-8: Endometrial Adenocarcinoma

悪性腫瘍には、癌化によりその発生母細胞と同じ遺伝的性格をうけつぐもの、失うもの、あるいは別個の遺伝的形質の発現をみるものなどがある。子宮内膜癌は、具体的にはホルモン依存性を含め形態学的にも機能的にも多彩な性格を有し、多方面から腫瘍性格の検討が必要である。

このセッションは四題のヒト内膜癌に関する研究で構成されている。

鈴木らはin vivo実験系としてヒト体癌培養株を確立し、これに存在するアルカリフォスファターゼに着目し、この酵素がestrogenにより誘導されprogesterone